

## 「風葉和歌集」の詞書(一)

### ——詞書の役割——

はじめに

文永八年(一二七一年)の冬、時の皇太后姞子の命により撰せられた「風葉和歌集」(以下「風葉集」と略す)は、当時存在した二百に及ぶ物語の中から千五百余首にのぼる物語歌を抜き出し、詞書を記した物語歌撰集である。現在収められている物語のほとんどが散逸しており、残された歌・詞書は散逸物語を復原する有力な資料の一つとされる。

元来和歌に付けられている詞書は、その歌の詠まれた作歌事情の叙述や歌題などを示したものである。「風葉集」の場合、

「風葉集」は物語歌撰集故、各々の物語の中で詠じられた物語場面・情景を要約したもの、或いはその経緯を記したものと考えられてきた。これまで、「風葉集」の構造を分析してきた結果、歌語の展開を主とした配列が、各々の部ごとに絵巻物の如く一つの物語のストーリーを読む様に並べられていること。また、外形上の形態は、「風葉集」に先立つ文永二年に編まれた「統古今集」に近似していると考えられること——などが考察された。以上のことを踏まえて改めて「風葉集」の各歌に付された詞書に目を向けると、単に各歌の物語での詠作事情の説明という内容とは言い切れず、「風葉集」自体の撰集態度とのかかわりが問題として浮かび上がってきた。つまり「風葉集」の詞書は、各歌の詠歌事情を簡潔にまとめ提供するということだけ

米田明美

でなく、「風葉集」各部の各配列をも説明するという働きも担っているのではないだろうか。物語からその歌の詠じられた過程・情景を単に短い文(詞書)に要約しただけでなく、その要約のし方に独自の意図・方向があると考えられるからである。以上の点に則り、詞書を「風葉集」各部の配列上に据え、「歌集」としての視点からその詞書の記述について考究を試みたい。「物語二百番歌合」や各物語場面の叙述などと比較し、その詞書の記載が目ざす方向について考えてみたい。

一、

まず「風葉集」各部において、その歌の置かれている順序に従い、「物語二百番歌合」や各物語場面の叙述と相違のある詞書を示してみたい。その差異の認められる箇所については、~~~~~を付しておく。尚勅撰集の形式を踏襲していると考えられる詞書(神祇・釈教部各冒頭に位置する神詠・仏詠の左註)や、「題しらず」と記載されている詞書については、その性格上今回は除外した。別の機会に改めて述べてみたい。

「風葉集」詞書

〈春上部〉

44 後夜にあかたてまつるとて、

つまちかき紅梅をを折りすれ

ばかごとがましくちるにあか

ざりし匂ひも思ひいで侍りけ

れば  
(「源氏物語」手習)

〈春下部〉

62 中宮清涼殿の花御覧じける明

ほの見たてまつりて(「あ

まのかるも」)

94 せちに思ひける女のあたりに、

ただ大かたにてまかり侍りけ

るに、花のこずゑに鶯のなく

をききて(「夜の寝覚」巻一)

95 つれなき女のもとにて花のお

もしろかりけるをみて(「う

つほ物語」藤原の君)

資料

83 をのにてよをそひきて春

(前・九十二番左)

36 ふちつばにて、ものひまよ

りきさきの宮をほのかに見た

てまつりけるあけほのに

(後・九十八番右)

せちに思ひける女Ⅱ中の君

(寝覚の上)

つれなき女Ⅰあて宮

春上部は、「はるたちける日よませたまひける」と、「立春」

を示す詞書をもつ、散逸物語「波のしめゆふ」歌がその巻頭に飾られ、「子の日」(7・8・9―歌番号。以下同)や「若菜」(12・13・14)などの行事を詞書に丁寧<sup>ニ</sup>に記しながら、春の行事・自然が味わえるよう配されている。44は、「物語二百番歌合」では浮舟の詠歌時の状況を端的に説明しているが、「風葉集」では27から44までの「梅」の歌群中の、紅梅の歌群(38―44)に位置しているため、「つまちかき紅梅を折りすれば」の語が挿入され、少し長い詞書となっている。

春下部は、「桜」の歌群がその巻頭から五十七首並び、春下部の歌数の大半を占めている。62は散逸物語「あまのかるも」歌であるが、歌こそ記されていないものの、現存本「あまのかるも」にこの場面とおぼしき箇所が存している。藤壺<sup>Hs</sup>において、そこから清涼殿の桜を御覧になっている中宮の姿を権大納言が見初めた場面と思われ、その情景を的確に説明しているのは「物語二百番歌合」の方であろう。「風葉集」の詞書は、中宮が清涼殿の花(桜)を御覧になっていることが強調されている。94・95は、各々詞書で相手について「せちに思ひける女」(94)、「つれなき女」(95)と示し、その名を語っていない。この記述では相手の名が伝わらないが、「花のこすま」(94)・「花のおもしろかりけるを」(95)と配列上の位置「桜」は明

記されているわけであり、配列鑑賞という点ではその役割を果たしているわけである。これは物語場面を丁寧<sup>ニ</sup>に要約し伝えようとするものではなく、むしろ配列上の位置を示す語(ここでは「桜」)以外は逆に曖昧にしようとする技巧であろう。配列を導く言葉は強調し、その他はできるだけ切り捨てようとする。「歌集」に重きを置いた記述と言えるであろう。

〈夏部〉

15冷泉院御息所いまだまゐり侍らざりけるに、うづきのついでにたちころに申しつかはしける  
(「源氏物語」竹河)

16あふひてふ名をかけてみせんと申して侍りける女のかへし  
(「みかにはにさける」)

18みかどいまだただ人におはしましけるとき、五月四日の夕つかたうちよりまかで給ひけ

またの日は卯月になりければ  
…(物語本文)

26承香殿女御の中納言の君三位中将につたへて、たれとかやおとにききしよけふだにもあふひてふなをかけて見せなむといひたる返し(後、四十三番石)

20二るの中將ときこえし時、すぎさせたまふ御くるまにのきのあやめをひきおとして

る道に、のきのあやめをひき  
おとしてさじきよりいだし侍  
りける（「狭衣物語」卷二）

廼五月五日女のもとにつかはし  
ける（「石清水物語」上巻）

廼女につかはしける（「うつは  
物語」祭の使）

廼冷泉院うまれさせ給ひてのち、  
前裁のなかにとこ夏のはなや  
かにさきたるををらせ給ひて、  
王命婦につかはせ給ひける  
（「源氏物語」紅葉賀）

夏部の巻頭の詞書は、「やよひのつこもりのよ……」と春  
から夏への狭間の夜を示し、次篇の「源氏物語」歌の詞書は、

（前・十番右）

女Ⅱ兵部卿の宮の姫君

女Ⅰあて宮

（本文）物語場面では四月。

お前の前裁の、何となく青み  
渡れる中に、とこなつのはな  
やかに咲き出でたるを、折ら  
せたまひて、命婦の君の許に  
書きたまふこと多かるべし。

（歌）

粥れせい院いはけなくおはしま  
しし時、なでしこの花を御ら  
むじて（後・四十八番左）

「……つづきのついたちころに申しつかはしける」と夏初日の  
暦日卯月一日を記している。この「竹河」の巻の記述では、  
「またの日は卯月になりければ……」と翌日から四月になっ  
たことは述べられているが、物語中の表現に「四月一日」とい  
う暦日は記されていない。意味内容の示すところは同じである  
が、この詞書の「四月一日ころ」という表現は配列上の位置、  
つまり前歌Ⅱの「やよひのつこもり」を受けての記述ではない  
だろうか。

Ⅱは賀茂祭の歌群中に存する歌である。「物語二百番歌合」  
の詞書では、「あふひてふ名」と詠じたのが承香殿女御の中納  
言であることが知れるのだが、「風葉集」の詞書では単に「女」  
とされ、その背景については明確に伝わってこない。だが祭の  
「葵」に掛かる「逢ふ日」の語は書き加えられているのである。  
Ⅱは、二首後のⅡの詞書に「五月五日」、またⅡに「さつき  
五日」と並べられているその順序通り、詞書に「五月四日の夕  
つかた、……」と暦日が記載されている。本文にも「四月も過  
ぎぬ、五月四日にもなりぬ……」とあり、物語場面を正しく伝  
えているのだが、「物語二百番歌合」の詞書と比べても、配列  
の展開故殊更この日付が強調されていると言えよう。

Ⅱにも、その「五月五日」の暦日が丁寧に記されているも

の、秋の大将が物語冒頭部で東宮に入内子定であつた兵部卿宮姫君へ歌を贈つたことは、この詞書では語られていない。厩日以外は、何も詳細は分らないのである。

183の「女」は、あて宮である。この物語場面実は賀茂祭の行列を見物した後のことであり、あて宮と懸想人達の和歌贈答の場であるが、この詞書からは何も伺い知ることはできない。

186は、夏部巻末近くの「撫子(常夏)」の歌群中(194~198)に存する。この詠作時の厩は実は初夏四月で、資料に記した通り本文では「お前の前裁の、何となく青み渡れる中に、とこなつのはなやかに咲き出でたるを……」と語られ、初夏故木々の緑が「何となく青み渡れる」と示されているものの、186の詞書には晩夏の配置のためこの語が略されている。この詞書の記述と本文を照し合わせると、資料記載の箇所を引用し詞書をなしたと考えられ、意図的にこの「何となく青み渡れる」が除かれたと言えるであろう。配列に重きを置いたための叙述と考えると差し支えないのではないだろうか。

〈秋一節〉

21ふ月のはじめつがた、風すずしく吹出でたる夕べよませ給

(本文) ……なほいと七月十日ばかりのほどに……けふ秋たつ

ひける(「うつほ物」内侍のかみ)

216女のもとにまかれりけるに、  
をきふく風のころあわただ  
しきまで聞こえければ(「心  
高き春宮宣旨」)

219しのびてしらかはの院侍りけるに、もの思ふ秋はあまたありしかど、いとかくはあらざりきかしたながめわびて  
(「夜の寝覚」散逸部)

223のわきたちたるゆふべ、きりつぼの更衣のははの許につかはさせ給ひける(「源氏物語」桐壺)

223前裁の中にをばなのまだほにいでさしたるも、露をつらぬきとむる玉のをはかなげにうちなびきたる夕べ(「源氏物語」宿木)

日にこそあれ……

361一条前斎院にてつれなきをうらみきこえて(後・八十二番右)

218しらかはの院にて、身のありさまおぼしつづくるゆふぐれに(後・九番右)

川きりつぼの宮すどころかくれてのち、ははのもとにつかはしける(前・五十六番左)

363おまへのせんざいのしもがれれを、女君もろともにながめたまひて(後・八十二番左)

(本文) 物語場面は九月二十余

26をのにすみ侍りけるに、秋の  
夕ぐれ、思ひ出づる事おほく  
て、「源氏物語」手習

26風あらかにふき、時雨した  
る夕べ、けふのあはれはみし  
るらんとおぼす人のもとにつ  
かはせ給ひける、「源氏物語」  
葵

日。かれなる前栽の中に、尾  
花の物よりことにて手をさし  
出でて招くが、をかしく見ゆ  
るに、まだ穂に出でざしたる  
も、露をつらぬきとむる玉の  
緒、はかなげにうちなびきた  
るなど、例のことなれど、夕  
風なほあはれなる頃なりかし。  
〈歌〉

29をののやまざとにて（後・二  
十五巻左）

（本文）…夕暮れの風の音もあ  
はれなるに、思ひ出づる事多  
くて、〈歌〉

29あふひのうへかかれたまひに  
し秋のぐれに、あさがほのみ  
やに（後・七十六番左）

（本文）物語場面は十月と考え  
られる。

…君は、西の妻戸の高欄にお  
しかかりて、霜柱の前栽見た  
まふ程なりけり。風荒らかに  
吹きしぐれさとしたる程、涙  
もあらそふ心地して…

秋上部の巻頭歌は、21の、「うつほ物語」の「立秋」の歌から  
始まる。その詞書には、「ふ月のはじめつかた……」と述べら  
れているが、物語場面では「なほいと七月十日ばかりのほどに  
……」と語られている。物語では「七月十日ばかり」と記さ  
れた暦日を、「ふ月のはじめつかた」という曖昧な表現に改め  
たのは、この六首後21から「七月七日」つまり「七夕」の歌群  
を有しているからであろう。配列を意識しての改編かと思われ  
る。

26は散逸物語「心高き春宮宣旨」の歌であるが、「物語二百  
番歌合」では「一条前斎院」と名が示されているのに、「風葉  
集」では「女」と表現されている。だがその歌を巡る景は「を  
ぎふく風のこころあわただしきまで聞えければ」と述べ、「秋  
風」の配列を表わそうとしている。これは、この26に関して語  
るべき内容（詞書）の重点の置き方が、「物語二百番歌合」と  
「風葉集」では異なることを意味しよう。「物語二百番歌合」

では歌へ連なる経過を説明しようとしているのに対し、「風葉集」の詞書は、事の経緯よりもその場の情景―特に配列を紡ぎ出す語を示そうとしていると言えよう。

22の歌は、「夜の寝覚」の末尾欠巻部に属すると考えられている。散逸部なので、物語場面が明らかではないが、「風葉集」の詞書には「もの思ふ秋はあまたありしか」と、「物語二百番歌合」の詞書より「秋」が強調されているよう。

23は「秋風」の歌群中に位置する。秋上部は、「秋の初風」(25―27)の小歌群、萩や萩をゆらす「秋風」(27―29)の小歌群、そして秋の夕べ身に染むばかり吹く「秋風」(29―30)の小歌群と三種の「秋風」が並べられている。この23は萩をゆらす「秋風」の小歌群中に存し、「風葉集」の詞書には「萩こそ語られていないが、「のわきだちたるゆふべ」と強い秋風が吹いたことを綴っている。

23は宿木の巻の歌で、物語場面では「九月二十余日」すぎの頃と記されている。本文にも「かれ／＼なる前栽の中に、尾花の、物よりことにて手をさし出でて招くが……」と叙述され、この23の歌に続いている。「物語二百番歌合」にも資料に記載した通りの詞書が付されているが、物語では晩秋の景故「かれ／＼なる前栽」とし、同様に「物語二百番歌合」はそれを正確

に写しとり「おまへのせんざいのしもがれを……」と示している。「風葉集」では歌の「穂にいでぬ」が採用され、まだ穂の出ていない「すすき」とし、秋上部中程に並べられているため、詞書には物語本文にある「かれ／＼なる」が略されていると推察できよう。配列上の位置を考慮し、敢えて削除したと言えるのではないだろうか。

25は、物語では九月である。この歌の前の記述は「夕暮れの風の音もあはれなるに、思ひ出づる事多くて」と、晩秋故風の音も一段と身に染みて……と述べられているが、この「風の音もあはれなるに」は詞書には語られていない。ここは「秋の夕」の歌群であり、「風葉集」の詞書は「物語二百番歌合」と比べて「秋の夕ぐれ」が丁寧に記されている。

25の物語場面は、八月二十日余りに葵の上の御葬式があり、四十九日も過ぎ十月の衣替の時期となっても源氏はまだ薄色の喪服に着替えない―十月十日頃と思われる。「君は、西の妻戸の高欄におしかかりて、霜枯の前栽見たまふ程なりけり。風荒らかに吹きしぐれさとしたる程……」と本文は綴り、朝顔の宮に消息を遣わされる。物語本文と比べると秋上部という部として配列への配慮からか「夕べ」が書き加えられ、「霜枯の前栽」は省略されている。「物語二百番歌合」は、物語場面を正確に

伝え、「秋のくれ」としている。しかも「物語二百番歌合」では葵の上を亡くし、深い愁いに沈みつつ朝顔の宮に文を贈った秋の暮の場面が、端的にかつ正確に語られているのに対し、「風葉集」ではそれらの事情には全く触れず、風景描写に徹している。哀傷部ではなく四季部の、特に秋上部に配したための詞書の記述と言えようか。物語本文からどの語をすくい上げ、どの言葉を削除するか、どのように要約・説明し詞書となすかは、その歌の置かれている部、そして配列上の位置に従いその方向が決まるのではないだろうか。

〈秋下部〉

302 女のもとをいたくあれたるを  
わけいとて(「うつほ物語」  
俊蔭)

310 宇治にまかれりけるに、霧霧霧  
とふかくたちわたりて、みね  
のやへぐも思ひやるへだてお  
ほくあはれなりければ(「源  
氏物語」橘姫)

312 一条のみやす所をのにすみ侍

女一俊蔭女

149 秋のころうちになうでたまへ  
るに、みこむかへの山寺にお  
こなひしたまふほどにてたい  
めんせでかへるとて(前・七  
十五番左)

321 一条の宮す所のとぶらひにを

りけるに、尋ねいりて、女二  
のみこのかたにて、霧霧霧のた  
此軒のもとまで立ちわたれる  
に、まかでむかたもみえずな  
りゆくはいかがすべきとて  
(「源氏物語」夕霧)

316 ものおほしける比、きくの花  
を御らむじて(「源氏物語」  
幻)

319 長月ばかりるあかしたる明は  
のに、きくををりて人の見せ  
待りければ(「うつほ物語」  
嵯峨の院)

338 あきののも御らんじがてら  
雲林院におはしましけるころ、  
紫のうへにつかはさせ給ひけ  
る(「源氏物語」賢木)

341 有明の月のまだよぶかきに、  
うちへまかりけるに、あらま  
しき風のきほひにほろほろと  
おちみだるる木の葉の露ちり

のにおはして(後・六十二番  
左)

177 むらさきのうううかくれ給ひて  
のち九月九日(前・六十四番  
左)

人の『朱雀院の第三皇子

25 源間の年雲林院に法文などな  
らひ給ひて、日ごろおはせし  
にむらさきのうへに(前・十  
三番左)

311 宇治におはしかよふころ、や  
まちのつゆをわけいりたまふ  
とて(後・六十六番左)



かかるといひややかに人  
やりならずぬれて（源氏物  
語「橋姫」）

349物おぼして御らんじ出だした  
るに、ききの櫛もいろづきた  
るころなりければよませ給ひ  
ける（「狭衣物語」巻一）

108あすかるの君うせにし秋

（前・五十四番右）

292は俊蔭の巻中の歌で、若小君が俊蔭の女を見出した場面であるが、詠者名が最終官職名で示されているだけに、この詞書では物語場面は正確には伝わらないであろう。配列の展開を指示する「いたくあれたる」、つまり浅茅生は述べられているが、「いつ・だれが・だれのもとへ」については曖昧になっている。310は、次に記した312と同様「霧」の歌群中に位置している。両歌とも「物語二百番歌合」と比べて、310は「霧いとふかくたちわたりて」、312は「霧のただ此軒のもとまで立ちわたれるに」と「霧」についての説明が加わっている。配列を潤滑にするべく詞書に書かれたと言えらるであろう。

316は、315からの「菊」の歌群中に置かれている。詞書には「きくの花を御らむじて」と「菊」を示している。この場面「物語二百番歌合」の詞書の記載通り、菊に綿を置き共にその

長寿を願おうとした紫の上が亡くなり、深い悲しみに沈む源氏が詠じたものである。だがこの「風葉集」の詞書では、その状況は知り得ない。「ものおほしける比」とだけ記され、源氏の悲痛な叫びは伝わらないであろう。

319は藤壺女御がまだ九の君と呼ばれていた嵯峨院の巻中の歌で、「この人」は朱雀院の第三皇子を指す。292と同様詠者名が最終官職名で記されているため、この詞書では物語場面の内容は明確に知り得ないであろう。配列を示す「長月」「菊」は語られているものの、その他は曖昧な表現になっていると言えよう。

338は、秋ノ部の木の葉に置く露を吹き散らす強い秋風を示す歌群（338、341）中に位置する。秋ノ部の初風や、萩の葉をそよそよと揺らす秋を告げる風とは少々異なる。「風葉集」の詞書には、「秋風」についての記述はないが、「物語二百番歌合」の詞書とほぼ同じ叙述ではあるものの、「あきのものも御らんじがてら」と配列の雰囲気合う語が補足されている。

341は338と同じ「秋風」の歌群にあり、「物語二百番歌合」の詞書と比べると、「あまましき風のきほひにほろほろとおちみだる木の葉の露ちりかかると……」と、晩秋に吹く木枯しにも似た強い風が丁寧に記述されていると言えよう。

349は、356からの「紅葉」の歌群中に並べられている。この「紅葉」の歌群も、346の詞書では「青き枝のかたえいとこくもみちたるを……」と片枝が色付く紅葉を、348の詞書では「いろいろの花もみちをこきまぜてつかはさるとて」と少しずつ色付く様を述べ、この349の詞書では「きぎの梢もいろづきわたるころ……」と、その紅葉の色付く様、広がる様を詞書で丁寧に表現している。「狭衣物語」の場合、伝本間の異同が著しく、「風葉集」の依拠した本文と「物語二百番歌合」に採用された底本が全く同一とは言えないだけに、慎重に考察しなければならぬが、この「きぎの梢もいろづきたるころ」の一文は大凡どの伝本にも存している。この物語場面は巻一巻末近くで、飛鳥井姫君を失い悲嘆にくれる狭衣大將が詠んだものだが、「物語二百番歌合」の詞書では端的に要約されているものの、「風葉集」では「物語おほして御らんじ出だしたるに……」と記されている。この「物語おほして……」の記述では、狭衣大將の深く悲しみに沈むその思いは伝わらないのではないだろうか。四季節故、季節の移ろいに重点を置いた叙述と言えるのではないだろうか。

〈冬部〉

371山ざとにすみける女のもとに、  
つねよりもしぐれあかしたる  
あしたにつかはしける（「夜  
の寝覚」巻二）

356女のゆくへおほつかなかくおも  
ほしなやみける比、をばなが  
もとのくさも霜ふかくなり行  
くを御らんじて（「狭衣物語」  
巻二）

356ただ人におはしましける時、  
こかはにまうで給ふに、よし  
野川のわたりにてみぎはの氷  
とちこめて、おほむ舟もえす  
ぎやらぬに（「狭衣物語」巻  
二）

416女院ゆくへしらでなげきける  
ころ、木がらしのあらくしく  
れうちしてまたふきかへし、  
あられのおとどろおどろし  
きをききて（「末葉の露」）

女』寝覚の上（中の君）

6 一品の宮人しれぬさまにおは  
しましけるを、ゆくへおほつ  
かなかくおほしめしなやみける  
ころ、をばながもとのおもひ  
ぐさのしもふかくなりゆくを  
御らむじて（前・三番右）

156 高野へまみらせ給ふとて  
（前・七十八番右）

迎宰相中將ときこえし時、ひさ  
しくれいならざりしまぎれに  
女君のゆくへたづねうしなひ  
て（後・九十六番右）

377の「山ざとにすみける女」は、父入道の住む広沢に身を寄せ、  
せている寢覚の上を指している。しかも「風葉集」の詞書では、  
広沢も宇治も「山里」として表現され漠然としているが、「つ  
ねよりもしぐれあかしたるあした……」と、配列の「時雨」  
(372-381)を示す語は記されている。

385は、「物語二百番歌合」の詞書とほぼ同じ表現で詞書が綴  
られているが、「物語二百番歌合」が「一品の宮」と名を語つ  
ているのに対し、「風葉集」の詞書は「女」としている。但し  
この「一品の宮」という記述は誤りで、正しくは飛鳥井姫君を  
指す。

408と同じ歌が、「物語二百番歌合」にも採られている。詞書  
を比較すると、「風葉集」の方がこの場面の状況の説明は詳細  
である。冬の景「みぎはの氷とちこめて」が綴られているのに  
対し、「物語二百番歌合」は事の経緯を示そうとしていると言  
えよう。

416は散逸物語「末葉の露」歌であるが、414から417までの「あ  
られ」の歌群中に位置する。ここも「物語二百番歌合」と比べ  
て、「あられのおとおろおとろしきをさきて……」と、冬の  
深まり行く景を記している。

（神祇部）

46六条院すまにうつろひ給はん  
とて、故院の御はかにまうで  
給ひける御ともにごぶらひて  
加茂のしものみやしろをかれ  
とみわたすほど、齋院の御け  
いにかりの御すいじんにてつ  
かうまつれりしと思ひいで  
られて、おりて御まのくちを  
とりて聞えける（「源氏物語」  
須磨）

66やがてうまよりおりて、みや  
しろのかたををがみ給ふ、神  
にまがり申したまふとて  
（「源氏物語」須磨）

47六条院、内大臣と申しける時、  
すみよしに御願はたしにまう  
でさせ給ひけるに、神の御と  
くをあはれにめでたしと思ひ  
て申出で侍りける（「源氏物  
語」落標）

106六条院すまに、うつろひたま  
ひけるころ、右近将監とけて  
みふだけづられにければ御と  
もにいでたつに、院の御やま  
にまうでさせ給ひけるよ、た  
だすの御まへ見やらるほどに、  
むまよりおりて御むまのくち  
をとりて（前・八十七番左）

89すまのわかれに（前・四十五  
番左）

325六条院宮にかへりたまひて  
のちすみよしにまうで給へる  
に、うらづたひのかぜのさわ  
ぎもおもひいで、たちいで  
させ給へるにきこえさせける  
（後・六十三番左）

神祇部はその冒頭に神詠・夢告の歌群（44-47）十四首を置

き、その後神社別（八幡・賀茂・春日・稲荷・住吉）に関する歌でまとまっている。466番は同場面の歌で、須磨へ饑居するため亡き父桐童院の御陵に参拝しようとして北山へ赴く途、下賀茂神社を見、かつて齋院の御寮の日行列に参加したことを思い出した時の歌で、「賀茂神社」の歌群（458-466）中に属している。両歌とも「物語二百番歌合」に採られているが、「風葉集」の詞書の方が「賀茂」神社を強調し、かつ「をがむ」という神への祈念の意が付け加えられている。

463は、住吉神社を中心とする歌群（461-466）に配されている歌である。「物語二百番歌合」と比べ、「神の御とくをあはれにめでたしと思ひて……」と、神への感謝の意がその詞書に含まれているように。

〈離別部〉

509天の迎ありてのぼり侍りける  
に、みかどにふしのくすりた  
てまつるとて「竹取物語」

510御かへし「竹取物語」

（左註）とてふしのくすりもこ

（物語では、この二首は贈答歌にはなっていない。）

（本文）その後、翁・女、血の涙を流して感へどかひなし。……薬の壺に御文そへ、ま

の御うたにぐして、そら近きをえらび、ふじの山にてやかせさせ給へりけるとなむ  
いらす。ひろげて御覧じて、いといたくあはれがらせ給ひて、物語もきこしめさす。……

離別部は、幾つかの歌語で関連付けながら悲憤感を深め、次第に哀傷の世界へ誘うよう配列されている。509は「風葉集」では509との贈答歌の形式をとっている。しかしこのかぐや姫と帝の歌が、物語では贈答歌になっていないことは既に樋口芳麻呂氏により御指摘されている。地上では手の届かない、永遠の別れを詠み、離別部巻末に位置し、後の哀傷部へつなぐ働きも担っていると思われる。贈答歌にするとその箇所だけ配列の流れが分断され、一つの物語世界として浮かび上り、印象が強くなるという効果をもつ。別々に詞書を記すより贈答歌とした方が、かぐや姫と帝のこの世での別離が強調され、そして左註の「とてふしのくすりもこの御うたにぐして……」の一文を書き加えることにより、この離別の配列がつむぎ出したストーリーは終結し、後の哀傷部へ導く様工夫されていると言えよう。

〈鞍旅部〉

511あふさかをこゆとてよめる  
（古とりかへばや）

512よをうらみて、あふみのうきはしといふところにももりな

598 すまりあかしにうつろはせ給ひて、みやこなく人につかはせ給ひける（「源氏物語」明石）

598 もろこしにて、ふるさとの女を夢にみて（「浜松中納言物語」巻一）

むとて（後・八十九番右）

20 すまよりあかしのうらにうつり給ひて、むらさきのうへの御もとに（後・三十一番左）

242 渡唐の後たびねのゆめにひのもとの大将の姫君、たれによりなみだのうみに身をしづめしほたるあまとなりぬとかしる、と見えければ（後・二十一番右）

鞆旅部の配列の前半（511-587）は逢坂の関から陸路東へ下る旅程を示す歌が並べられ、後半は住吉から海路中国へ進むよう歌が配されている。この511は鞆旅部の冒頭に位置し、古本「とりかへばや」物語の歌である。「物語二百番歌合」の詞書では「あふみのうきはし」と地名らしき名とこの歌までの事の経緯を記しているのに対し、「風葉集」の詞書は京を出発し東へ向う配列故、その起点「逢坂をこゆ」と述べている。次512の詞書も、「石山にまうでけるに、あふさかをすぐとて」と「逢坂を過ぐ」となっている。

598 は、須磨から明石へ移った光源氏が紫の上に遣わした歌であるが、「物語二百番歌合」の詞書とよく似た内容ではあるものの、「風葉集」は「みやこなる人に」と紫の上の名を語ろうとはしていない。

598 は鞆旅部巻末近く、「もろこし」へ到着した者の望郷の歌が集められている箇所であるが、こゝも「物語二百番歌合」の詞書と比べると、夢に現れた女性の名が「風葉集」では「女」と隠されている。

〈冥傷部〉

613 母のおもひにて北山にこもり  
るて侍りけるころ、花をとりにて中宮にたてまつるとして  
（「夜の寝覚」末尾欠巻部分）

614 紫の上かくれ侍りて、かのすみ侍りけるはるのかたの花ざかり、いにしへのかはらぬを御らんじて（「源氏物語」幻）

234 ははうへかくれたまひぬとき  
こえし時よりきたやまにこもり  
りて、つぎのとしの春さくらにつけて中宮に（後・十七番右）

126 むらさきのうへかくれ給ひて  
のち、六条の院の御まへの花ざかりに（前・六十三番左）

62 むらさきのうへはかなくなり  
侍りける秋夕ぎりのおとどの  
はのかくれにしもこのころ  
の事ぞかしと思ひいでられて、  
六条院にきこえさせ侍りける  
〔源氏物語〕御法)

60 左のおほいもうち君身まかり  
て後、女の思ひに侍りける人  
のもとに、あさちにつけて遣  
はしける〔うつほ物語〕忠  
こそ)

60 この世のほかになりなば、あ  
はれと思ひなんやと申し侍り  
ける人に〔浜松中納言物語〕  
逸亡首巻部)

70 女におくれて、とし月ありて  
後、かの女のね侍りける帳を  
うちはらひてふすとて〔う  
つほ物語〕忠こそ)

63 は、「夜の寝覚」の末尾欠巻部に属している歌である。こ

131 むらさきのうへかくれたまひ  
てのち六条の院に〔前・六十  
六番左)

〔本文〕：〔歌〕おなじくは、  
おなじのにおほしめし給は  
ぬ。とて、をかしまあさち、  
御ふみさしたり。

人Ⅱ中納言  
散逸部分ではあるが、後にこ  
の二人が登場することからし  
て、物語中で辞世の歌であつ  
たと考へ難い。

〔本文〕：北方の御帳のうちに、  
おまし所して、御とのこもり  
などするに、〔略〕〔歌〕と  
て、おましをうちはらはせて、  
ふし給へば……

の歌は「物語二百番歌合」の詞書の「ははうへかくれたまひぬ  
ときこえし時より……」という書かれ方や、「風葉集」雑二部  
の170の寝覚の上の歌の詞書「世になきさまに聞こえてのち、右  
大将北山にこもれりとつたへききて……」の記述などから偽死  
の折の歌と考えられる。だが63の詞書の記し方では母の喪に服  
してとなり、偽死の際の歌とはこのままでは受け取り難い。散  
逸部分故断定はできないものの、配列を意識しての叙述と言え  
るのではないだろうか。また同様に「夜の寝覚」の末尾欠巻部  
の歌が、もう二首(64・65)この哀傷部に存している。この二  
首も寝覚の上が亡くなり、その喪に服している子供達(右大  
将・中宮)の詠歌である。この二首は他に資料がないため、偽  
死の際の歌が真実寝覚の上の死が語られていた際の歌かどちら  
か今のところ判断つかない。どちらにしても偽死か真実の死か、  
詞書に区別がないのは問題であろう。63の詠歌時、まさこ君は  
母の死を信じ切っていたと思われ、また単なる死を羨したもので  
はなく一度は死にその後何らかの方法で蘇生したと考えられ  
ることから、この63の場面では服喪の記述で良いのであろうが、  
「物語二百番歌合」の詞書と比べ、また物語内容から考察する  
と正確な記述とは言えないであろう。

64 は「物語二百番歌合」の詞書の記述と似ているが、同じ

「花ざかり」でも「風葉集」には「はるのかたの」の一語が加つている。哀傷部前半(602-601)は四季の順に哀傷歌が並べられており、この歌は春(602-616)の配列中に位置している。

602も同様に、「物語二百番歌合」と比べ「秋」の一語が補われている。621から608までは、秋の哀傷歌でまとまっている。

608は一応哀傷の詞書が記されているが、実は夫を亡くした左大臣北の方から右大臣(橘千陰)への求婚の歌である。「左のおほいまうち君身まかりて後……」とか「女の思ひに侍りける人に」と詞書に示されてはいるものの、本文ではこの歌を記した手紙に「おなじくは、おなじのにやおはしめし給はぬ」と、求婚を意する一文を綴っている。故左大臣北の方が、北の方を亡くした右大臣に思いを寄せ、財宝の限りを尽くし気を引こうとした歌である。

600は、「浜松中納言物語」の逸亡首巻に属する歌である。哀傷部後半(602-700)は、辞世の歌に始まり、葬送・服喪・喪はつ・夢・追慕……という時間配列になっていて、この歌は辞世の歌の歌群(602-600)中に位置している。この詞書の「人」は中納言と考えられている。渡唐の決まった中納言は、互いに思いを抱いている左大将の娘と別れることになる。二人の間の距離は海を隔てることとなり、その会えない年月を考えると歌

に哀傷の響きがあるのは当然であろう。だがこの歌の詠じられた場面を要約して詞書と為しているとしても、物語内容からみると正しい記述そして位置とは言い難い。卷二以下で二人が登場しており、臨終の場が語られていたとは考え難いからである。ここは配列に従い、配列に準じる言葉だけを物語場面からすくい取り記したのではないだろうか。

700の「女」は橘右大臣の北の方、つまり忠こそその母である。この歌は哀傷部卷末歌で、この詞書をそのまま詠むと、女に先立たれて年月がたち、女と共に過ごした帳台をとり払って……となろう。後半の配列だけでは辞世の歌に始まり、葬送・服喪・喪はつ・弔問・口寄せ・夢・追慕・年月を経て亡き人へ思う―までを時間配列している。亡き人も追慕の彼方となり、帳台も取り除き、年月の移ろいを訴えたものであろう。だがこの「うつほ物語」の本文では、帳台に寝具の用意をさせて御座所の塵を払わせる「おましをうちらはせて……」とあり、帳台をとり去ったのではない。忠こそその母の死が語られて五年は経ており、本文通り塵を払わせてでも良いと思うのだが、帳台をとり去ったとの記述の方が亡き人の思い出との訣別の意味も加わり効果的であろう。正確に本文を要約しておらず、ここも配列に都合の良い方向で詞書を記述したと言えるであろう。

## まとめ

以上、今回春上・部から哀傷部までの「風葉集」の詞書について配列をその中心に据え、「物語二百番歌合」や詠歌時の物語本文などと比較し、考究してみた。詳しい考察は、恋部・雑部の分析も加え次回に譲りたいが、哀傷部までその詞書を分析してみても、「風葉集」の詞書は単に物語場面を要約し作歌事情を説明するという意図だけをもつものとは言い難いと思われる。

物語場面と比べて配列上の位置とそぐわない語は敢て削除し、配列を進めようとする詞書。「物語二百番歌合」が相手の名を丁寧に記そうとするのに対し、「女・男・人」として物語背景を曖昧にしようとする詞書。これら詞書について考え合わせると、「風葉集」の詞書は今まで考えられてきた各詠歌事情を示すために添えられたものではなく、むしろ配列を鑑賞する方向で作的に本文を要約したものとと言えるであろう。「風葉集」の詞書は、各部の配列を重視し記述されていると考えられる。つまり、その部において置かれた歌の位置の説明、つまり配列の鑑賞を指示するものと言えようか。各々別個の物語の歌を連ね、その配列の展開により全く別の新しい作品・ストーリーを

作り出す。各物語歌を正しく詠み味わおうとするものではなく、別の作品へ変貌させるための指針―それが「風葉集」詞書の果たす役割と言えよう。「風葉集」の詞書の記述は、たとえ物語本文と多少異なる内容が叙述されていても、読み手は物語場面の方ではなく、詞書に示された解釈を読み進むべきであろう。物語の登場人物の名や物語での活躍・事の経緯など伏せられている詞書は、物語場面にまで遡って考える必要はないのである。「風葉集」の詞書は、あくまで各部の各配列がつぎ出す世界を鑑賞するための手びきなのである。

そしてこの詞書の記述は、「風葉集」が物語歌を集めた「歌集」であるだけに重要な意味をもつのではないだろうか。物語享受史の中で、新しい分野を開拓したとは言えないだろうか。

## 注

- 1 藤河家利明氏「風葉和歌集の詞書」「中世文芸」昭和四十五年三月。
- 2 拙稿「風葉和歌集」の構造(一)―離別部の構成、「甲南女子大 学論叢」第三号、昭和五十六年一月、以下、釋旅部・神祇釈教部・哀傷部・四季部・恋一部の構造について論文あり。
- 3 引用は、「物語二百番歌合」「風葉集」とも「新編 国歌大観」を用いた。資料で引用文の後に記す、(前・二十七右)等について



- ては、「前」は「前百番歌合」、「後」は「後百番歌合」、数字は  
 番われた番号である。また歌の巻頭に示した歌番号は、「新編  
 国歌大観」のそれである。尚「源氏物語」は日本古典全書（朝  
 日新聞社）、「うつほ物語」は校注古典叢書（明治書院）、「竹取  
 物語」「夜の寝覚」は日本古典文学大系（岩波書店）を用いた。
- 4 拙稿「風葉和歌集」の「よみ人しらず」歌・「題しらず」歌  
 について、「甲南国文」第四〇号 平成五年三月。西本寮子氏  
 「風葉和歌集」「題しらず」考、「広島女子大國文」第九号 平  
 成五年三月。
- 5 小木喬氏「散逸物語の研究 平安・鎌倉時代編」（昭和四十八  
 年 笠間書院）に詳しい。
- 6 三谷栄一氏「狭衣物語の伝来」「国文学論叢」昭和十七年六月。  
 矢部敦子氏「狭衣物語第二系統の成立」「国語国文」第三四卷八  
 号昭和四〇年八月。吉田幸一氏「深川本狭衣とその研究」昭和  
 五十七年・十二月古典文庫刊。田淵福子氏「狭衣物語」と「百  
 番歌合」所収本文をめぐって、「甲南国文」第三十五号昭和六十  
 三年三月。同氏「狭衣物語」と「風葉和歌集」「国語国文」  
 （高野山大学）平成四年十二月。など。
- 7 中田剛直氏編「校本 狭衣物語 卷一」（昭和五十一年十一月  
 桜楓社）に依ると、このあたり異同のあるのは一本（為家本）  
 のみで、しかも「いろつきわたりにけるも」の程度である。
- 8 樋口芳麻呂氏「風葉和歌集」の人選歌―「竹取物語」「落窪  
 物語」を中心に―「国語国文学報」（愛知教育大同語国文研究  
 室）第四十二号 昭和六十年三月。